

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2023年 3月 8日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 博士課程一貫 5年

氏 名 高村 満衣

助成の種類	令和4年度 ・ 在外研究助成			
研究課題名	タンザニアにおける青少年の進路選択 一キゴマ州M地区出身の子どもの事例			
受入機関	タンザニア、ソコイネ農業大学			
渡航期間	2022年 12月 14日 ～ 2023年 2月 24日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	624,000 円		
	使用した助成金額	624,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳	費 目	金 額 (円)	
		渡航費	401,210	
		滞在費＋現地交通費の一部	222,790	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団のご支援により、タンザニアへの現地調査を滞りなく行なうことができましたことを、感謝いたします。院生であっても申請できるフィールド調査研究への助成事業は、大変少なく、とても助かりました。			

成果の概要

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程一貫5年 高村 満衣

研究目的

タンザニアは独立以降、初等教育の普及が進み、80年代には小学校就学率が90%を超え、現在（2016）でも総就学率93.2%、純就学率85.8%という高い数字が維持されている。アフリカ諸国の中でも高く、教育の量的拡大については成果が出ている。一方で、近年教育の質については問題が指摘されている。タンザニアの初等教育過程では、二度の国家試験がある。4年生時の進級試験の再受験は認められているが、7年生時の卒業試験の再受験は認められていない。よって、不合格だった子どもの最終学歴は、小学校卒業になる。さらに、これまでスワヒリ語で教えられてきたにも関わらず、中等教育では教授言語が英語になる。このような教育現場において、子どもたちは教育現場に適応できず中退者が増加している。既往研究の多くは、中退者の数や、不登校や妊娠などといった中退の原因を明らかにするものに止まっている。

一方、これまでの現地調査において、生業にたずさわり、進学という道ではなく、自身で生計の基礎を築こうと試みる子どもがいた。彼らは、将来を見据え、積極的に最終学歴を小学校にとどめ、または中学校に進学しても中退という道の選択を検討していたのである。先行研究では、中退について消極的な原因のみを指摘しているが、本研究では、積極的な進路選択のひとつとしても中退を捉え、進学し続けている者と中退した者がどのように進路、ライフコースを選択しているのかを明らかにすることを目的とする。

研究成果

今回の調査では、2016年、2017年に報告者が調査対象としていた子ども108人の追跡を実施した。2017年時小学6年生108人（男子51人/女子57人）のうち、男子1名を除く全員が初等教育卒業試験を受けていた。その結果、初等教育卒業試験合格者は男子45人/女子35人であった。一度小学校卒業試験を受けた者が他校への転校することは、2017年より全面禁止となったため、卒業試験不合格者は進学先を絶たれた。それ以前は、他校へ5年生くらいから再入学し、再度試験を受けていた。2017年からは留年も国家試験が行われる学年以外、厳しくなった。2022年より、初等教育卒業試験不合格者が翌年のみ再試験が認められることになったが、制度の実用化への課題は多い。キゴマ州M地区7校のうち、1

校のみで2名が7年生をやり直しただけに留まっていた。

今回の現地調査において72人にインタビューを行った。留年することなく進学した生徒たちは、中等教育前期4年生2022年11月にNECTAと呼ばれる国家試験を受け、その成績結果が2023年1月末に出たばかりであった。そのため、進級先や進学先が未定であり、実家や親戚の家で長期休みを過ごしていた。

一方、小学校卒業試験の不合格者の男子は、バイクや三輪バイクのタクシー、車の修理士、または日雇いで働いているものがいた。女子は結婚、出産を経験しているものが多くいた。その一方、都市部へ家政婦として出稼ぎや仕立屋を目指している、または既になっているものがおり、収入を得ていた。中等教育前期に進学したにも関わらず、中退した者のなかには、女子生徒の場合、結婚を理由とするものが多かった。男子生徒は、経済的自立を図り、知り合いや親戚のネットワークを駆使し、ディスクジョッキーやネイリスト、また商店の売り子として働いていた。彼らは、学校へ行くことと生活を送ることは別世界であり、早くお金を稼ぐには、中退が最善策であったと語った。

初等教育卒業試験不合格者と中退者の生計活動を目の当たりにしている、進学した生徒たちは、早く仕事を始めたい、お金を稼ぎたいという欲望を駆られていた。中等教育前期を卒業したとしても、働き口が容易に見つからない現状では、経済的理由により、進学も難しく、早くに生計活動をしている友人たちに憧れを抱いているようであった。彼らの姿は、中等教育への期待を低下させ、価値を下げることに繋がっている。ある生徒が、学校へ進学することは時間を無駄であると言い切ったように、進学することへの不信感が広がりつつある。しかし、政府は学校を増設し、中等教育前期、また後期までも無償化する動きをとっているが、草の根レベルの教育への期待感は年々弱くなっている。今後、インタビュー結果から、彼ら彼女らのライフコース選択の背景を分析し、より議論を進めていく予定である。

今回、過渡期にあたる青年になった調査対象から、彼らの葛藤について直接聞くという貴重なデータを得ることができた。本助成の支援がなければ、フィールドに滞在することは難しかった。本助成に採択いただいたことに感謝を申し上げたい。また、今後の研究に繋げ、タンザニアの教育政策への新たな視座を検討していきたい。